慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

| | |
|---|---|
| Title | ミルの生産要素論 |
| Sub Title | |
| Author | 榎本, 鉱治 |
| Publisher | 慶應義塾理財学会 |
| Publication year | 1927 |
| Jtitle | 三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.21, No.1 (1927. 1) ,p.73- 98 |
| JaLC DOI | 10.14991/001.19270101-0073 |
| Abstract | |
| Notes | |
| Genre | Journal Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19270101-0073 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# ミルの生産要素論

榎本鑛治

## 一

ジョン・スチュアート・ミルは、彼の大著「經濟學原理」第一篇生産論の第一章に於て生産の要素を取扱つて居る。私は左に其の大要を紹介する。

ミルの見解に依れば生産に必要なるものは、勞働と適當なる天然物(labour and appropriate objects)とである。而して玆に謂ふ所の勞働には肉體的と心意的(bobily or mental)との別がある。尙ほ一層廣く云へば筋肉的と神經的(muscular or nervous)との別がある。勿論此の觀念の中には、啻に努力其物(exertion itself)のみならず、又不快の種類に屬する總ての感情(all feelings of a disagreea'le kind)、詳言すれば人間の思索若くは筋肉を使ふ場合に隨伴する一切の肉體的不便や心意的苦惱(all bodily inconvenience or mental annoyance)、或は特殊の職業に於ける兩者をも必ず包含せしめなければならぬ。

次に適當なる天然物に就て云へば、天然物の中には自然に存在し又は成長して直ちに人間の慾望を充たすものがある。例へば小屋の代用に供せらるゝ巖窟、樹洞の如き、又は食用に供せらるゝ果實、樹根、蜂蜜等の如きものである。併し此の場合と雖も、尙ほ一般には之を發見したり又は之

を利用するために相當の勞働量を必要とする。是等は原始的人間社會を除けば殆んど重要ではないが、其の他の天然物は何れも人間の努力を以て或る程度の變形(transformation)を加へた後に、始めて人間の慾望に役立つものである。事實上狩獵漁撈には相當の勞働を必要とするけれども、更に其の獲物を食用に供するに先立ちて、之を殺し之を割き之を調理するの勞働を加へなければならぬ。凡そ天然物が直接人間の使用に適する形態に變せらるゝ迄に受くる變形の程度には、小は其物の本質及び外形の僅少なる變化より、大は其の本原的形態及び構造の痕跡を知る可らざる程完全なる變化に至る迄、種々多樣の差異がある。實例を擧げれば地中より出づる鐵鑛の一片と、其の製品たる鍬、斧との間には未だ多少の類似點がある。然るに磁器と其の原料たる花崗岩の微片との間には、遙かに類似點が少ない。更に綿羊毛若くは棉花と、モスリン織若くは羅紗織との間には、最も著しき差異がある。但し綿羊毛と棉花とは決して自然に生ずるものではないが、ミルの見解を以てすれば既往の勞働と注意との成果 results of previous labour and care) であるが故に然か云つたのである。斯の如く終局の生産物(ultimate product)と天然の本體(substance supplied by nature)との相違する所が餘りに甚だしきを以て、常用語にて之を云へば自然は單に原料(materials)を供給するに留まるのである。

併し乍ら自然は各種の原料を供給するのみではない。更に幾多の力(powers)をも供給するのである。宇宙の物質は、人手を待つて其の形態及び屬性(forms and properties)に活動を起すものではない。且又其の活力(active energies)は、勞働と協働し、更に勞働に代用せらるゝことさへある。例へば早期の人は麥粉を製するに石臼を用ひたが、後には之に要する筋肉的努力も甚だしくあるし、又其の疲勞も夥しきを以て、主人の命令に服從せざる奴隷を懲らす道具に供せられた。然るに奴隷の勞働及び苦痛も尙ほ之を節約するの益あるを知り、風力又は水力を藉りて其の石を廻轉せしむ可き器械を發明して、此の肉體的努力の大部分を節約するに至つた。是れは自然的働因(natural agents)即ち風又は水の重力が勞働に代用せられた實例である。

斯くて、ミルは生産の要件たる適當なる天然物を說明したる後節を改めて他の生産要件たる勞働の職能を說明するのである。

## 二

ミルは勞働の職能を說くに先立ちて、斯う云つて居る。曰く前述の如く或る自然的働因を利用して一定量の勞働を省きたる場合は、往々勞働と自然力との比較的職能(comparative functions)に就て誤まれる想念を暗示し勝ちであると。即ち自然力と人間の勤勉との協働は、他の場合には勞働を用ふ可き作業に利用せられるとか、或は文字通り人手に依て作らるゝ事物の場合には、自然は單に受働的原料を供給するに留まるとか誤認するの類である。併し是れは一の錯覺である。如何なる場合に於ても自然力の作用は、等しく能働的である。例へば亞麻又は大麻を用ひて麻布を織る場合にしても、世人は之を何と稱するか。必ずや自然力の共同作用ありとは認めまい。去り乍ら此の全般の作用が遂行せられた完成品の纖維の分離せざるは如何なる力に基づくか。是れ、即ち個々の纖維に粘靱性附着力(tenacity, or force of cohesion, of the fibres)があるからである。而も此の粘着性は

自然力の一である。

其の他自然に對する人間の動作を見るに、何れも自然力は唯だ物件を適當の位置に移動することに留まるのである。而して天然物の內在力(internal forces)を活用するに適當な位置へ物件を移動する作用丈けは、人間が物質に就てなし得る所である。即ち人間は一物を此處彼處へ移動することが出來る丈けである。少しく實例を擧げると、人間が種子を地中に播けば生育なる自然力が作用して成長するし、斧を以て樹木を伐採する場合には重力なる自然力が作用して倒れるし、鋸を以て之を挽けば剛能く柔を制すと云ふ自然的屬性が作用して板となり柱となり、更に之を適宜に按排して釘等を用ひて之を結合すれば机となり又家ともなる。又薪を焚いて生ずる火力を利用して食物を調理したり、或は鐵を熔解したりすることも出來る。其の他麥芽を變じて麥酒とし、或は甘蔗の液を變じて砂糖とするのである。此の故に人間は、物質を移動する以外に之を活用する手段を有せざるものである。運動と之に對する抵抗と(motion and resistance to motion)は、人間が筋肉組織を有する唯一の目的である。即ち人間は筋肉を收縮して外界の物件に壓迫を加へることが出來る。而して其の壓迫が強大ならば其の外界の物件を活動させ、又其の外界の物件が既に活動せるものならば或は其の活動を沮止し、或は其の方向を變更し、或は其の活動を全然停止させることが出來る。而して人間は是れ以上何事もなし得ないのである。併し乍ら之に依て人類は、自然力に對する總ての習得的支配を充分に與へられるのである。而も此の支配は人類が既に充分用ひて居る所であるが、其の無限に伸長す可きは些少の疑も容れぬのである。即ち人間が此の力を用ふるに或は現存の自然力を利用することに基づく場合あり、或は自然力創造のために各種の物件を混合し又は組合せることに基づく場合がある。例へば薪に火を放ち、汽鑵に水を滿して火上に置き、火力を借りて之を沸騰せしめ、蒸氣の膨脹力(expansive force)を創造するの類である。

右の如く自然界に於ける勞働は、常に唯だ物件を活動せしむるために用ひらるゝのである。其の他は悉く物質の屬性即ち自然の法則のなす所である。人間の熟練と巧妙とは、彼等の力に依て實用に供せられ得、又人間の欲求する結果を齎らし得可き運動を發見するに專ら用ひらるゝのである。併し、運動は、人間が彼の筋肉を用ひて即時に又直接に生產し得可き唯一の結果ではあるけれども、彼の欲求する一切の運動が彼の筋肉に依て即時に生產せらる可きであるとは限らない。先づ最も顯著なる代用物は、家畜の筋肉的動作である。次で無機の自然力も。亦之を幇助するために利用される。例へば風車の如し。勿論風力又は水力を利用する迄には、其の裝置のために相當の勞働を必要とするけれども、是れは絕えず繰返すものではない。故に大體に於て勞働の一大節約が出來る譯である。

斯くてミルは、勞働の效力に及ぼす自然の程度を論ずるのである。

## 三

或る學者は問題を提唱して、自然の勞働に役立つ程度には職業の種類に依て多少の差異ありや否やと云ふ。而して甲の職業には勞働を要すること多く、乙の職業には自然を要すること多しと答へる。然るに此の回答に對してミルは大なる觀念の混同があると考へる。彼の意見は次の如くである。

即ち自然と凡ゆる人事との關係は無限であり、又測り知ることが出來ない。故に此の事に於ては彼の事に於けるよりも自然の幫助多しと云ふことを決定するのは不可能である。且又何人と雖も、所要の勞働の多少を斷言することは出來ない。例へば所要の勞働は少量なりとも、其の勞働が絶對に欠く可らずとすれば、其の成果は自然の產物であると同時に、勞働の產物でもある。即ち二個の條件が等しく其の結果の生產に確かに必要であるとすれば、其の幾何量が一方の條件に依て生產せられ、又其の殘量が他方の條件に依て生產せられると云ふのは無意味である。恰かも鋏にて物を切る時に何れの刃が多く役立つかを決定せんとしたり、或は五と六とを乘じて三十の數をなす時に五と六と何れが多く役立つかを決定せんとしたりするのと同樣である。通常斯の如き考へは、即ち自然は製造業に於けるよりも農業に於て人間の努力を助けること多しと假定する形態を採るのである。此の考へ方は、專らフヰジオクラット一派に依て唱道せられ、アダム・スミスも亦之に追從したが、是れは賃子(rent)の本質を誤認せる事實に基づくのである。今斯る論者の見解に從へば、土地の賃子即ち地代は、自然的働因に對して支拂はれる價格であるけれども、製造業に於ては斯る價格の支拂はれることを見ない、畢竟斯る價格を支拂ふは支拂はる可き勤勞が多量に存するからであるとなすのである。併し乍ら少しく注意して之を考へれば、其の然らざることを知るであらう。即ち土地の使用が價格を有するは、單に土地の面積に制限あるが故にして、又若し製造業者の用ふる空氣、溫熱、電氣、化學的働因、其の他の自然力にも其の供給に制限ありて、土地の如く獨占擅有せらるゝならば、夫等に對しても亦賃子を支拂はざるを得ないのである。

茲に於て自然的働因の數量には有限無限の別あることが分る。之に就てのミルの見解は左の如くである。

## 四

前述の理よりして自然力に緊要なる區別が生ずる、即ち自然力の數量に就て云へば、或る物は無限にして他の物は有限である。勿論數量無限と云ふも文字通り無限の意に非ずして、實用上無限なりとの義である。詳言すれば其の數量が、或る狀態に於て少なくとも現在の狀態に於て之を利用し得可き數量以上に存することを意味するのである。例へば新開國の土地の如きは、實用上其の數量に制限なきものである。併し新開國と雖も、市場若くは運搬に好都合なる土地は、大抵其の數量に制限がある。此の故に總ての古國に於ては、耕耘に適する土地は、必らず其の數量に制限ある働因の中に數へらるゝのである。其の他灌漑用の河水、飲料用の井水、利用せらる可き水力、石炭、鑛石等の如きも、亦其の數量に制限あるものである。尙ほ大海に於ける漁獵も一般には數量無限なれど、鯨獵は有限である。之等に反して大氣、水運等は無限である。但し斯る運輸の職能に適用せらる可き波止場若くは着船場の良好なるものを得るには多大の困難がある。

茲に於て或る自然的働因の數量が實用上無限なる場合には、其の人爲的獨占を許容するのでなければ、其の自然的働因は全然市場價値(value in the market)を有し得ざることを知るであらう。其の理由は如何なる人も無償に得らる可きものに對して之が報酬を得ないからである。併し乍ら制限が實用上作用する時には、詳言すれば所有せらる可き物件が豐富に存在せずして、之がために需要に

應じて取得し難く、擅有し難く、又使用せられ難き時には、直ちに自然的働因の所有若くは使用は交換價値(exchangeable value)を有するに至るのである。例へば水力を供給する瀑布に對して價値の支拂はるゝが如き、是れである。又耕地や便利の地點が高價に賣却せられ、又之を賃貸すれば地代を取得し得るが如きである。

以上に於てミルは、生産の要素としての適當なる天然物を說き終つた。次に彼は章を改めて生産の一働因としての勞働を說くのである。

## 五

或る人間の使用に適應せる物品を生産する勞働には、直接に其の物品に用ひらるゝものがあると同時に、又次回の生産を容易にし且之が實現に必要なる準備作業に用ひらるゝものがある。例へばパン製造に就て云へば、直接パン其物に用ひらるゝ勞働は燒く人の勞働であるが、間接にパン製造に用ひらるゝものは、麥粉を生産する製粉業者の勞働、及び麥種を播き之を苅る農夫の勞働である。更に關係遠きものながらパンなる成果を獲るに欠く可らざる勞働には、播種のために土地を耕耘する農夫の勞働もある。而も是等總ての勞働に對する報償は、結局パンの代價より得るのである。右の理より推してパンの代價より報償を受くる勞働者には、耕作用建物を建築する大工、煉瓦職あり、麥作の保護に必要なる墻壕を作る植木職、土工あり、鋤鍬等の道具を製作するに必要なる鐵鑛を採掘し鎔解する鑛夫がある。併し是等の勞働者及び鋤鍬の製造人の報償は、其の勞働の成果が數年の壽命を保つが故に、數年間の收益より製造せらるゝパンの代價より支拂はるゝのである。其の他之に算入す可きものには、小麥の生産地より其の終局の使用地へ運搬する勞働がある。殊に大海を横斷して麥粉を運搬する場合には、車力水夫等の勞働者以外に車輛、船舶等の如き高價なる道具を必要とするもので、而も此の車輛船舶を建造するには、多量の勞働が投ぜられたものである。但し造船工、機械工の勞働に對する報償は、製造品が麥粉のみを運搬するものでないから、右のパンの代價より全額を支拂ふ譯ではない。何となれば通常船舶の存續期間は數年乃至十數年に及ぶからである。

故に或る貨物を生産する勞働を評價することは、決して簡單なる運算の能くする所でない。即ち其の計算科目は非常に多くして、或る人は之を無限の如く考へるかも知れない。例へばパン製造に雇傭せらるゝ勞働の一部分として、鋤を製作する鍛冶屋の勞働を數へ込むならば、勢ひ鍛冶屋の使用する道具を製作する勞働、及び夫等の道具を製作する場合に使用せらるゝ道具、更に遡れば車物の本原をも數へ込まなければならぬ。併し此の上昇的階段を一歩進めれば、遂には餘りに微細にして計算し難き分數となるのである。例へば同一の鋤が十二年間毀損せずに使用されるとすれば、其の鋤を製作する勞働は僅かに其の十二分の一丈けが年々の收穫の勘定に組込まるれば宜い道理である。然るに鋤製造人は恐らく同一の道具を用ひて百丁の鋤を製作し得るものであるから、結局千二百分の一の勞働が單一農場に於ける一年の收穫の勘定に組込まれゝば宜いのである。更に此の分數を小麥の袋數及びパンの塊數に割宛てれば、斯の如き數量は餘りに極微にして、之を計算するも其の貨物に關する實用に役立つ所は殆んどないのである。勿論此の道具製作者が勞働しなかつたとす

れば、小麥もパンも決して生産せられないに相違ないが、去ればとて小麥やパンを賣却する場合に此の道具製作者の勞働を算入して一錢の十分の一丈け高價に賣却せらるゝものでもない。

以上に說く所は、生産の一働因としての勞働には直接に生産物件に用ひらるゝものと、他物生産のための準備的作業に用ひらるゝものとの區別があると云ふのである、併し勞働の樣式は前記の二種に限られるものではない。

## 六

他の樣式の勞働の一は、或る物件の生産に必要ではあるが、其の關係は間接若くは遙遠なるものである。夫れは即ち、勞働者が其の生産に從事せる間彼等を維持す可き生活資料を生産するに用ひらるゝ場合である。斯の如き勞働の先行的使用は、極めて小規模なる場合を除けば總ての生産的作業に必要なる條件の一である。漁夫及び獵師の勞働を除けば如何なる種類の勞働と雖も、其の報酬は即時に支拂はるゝものではない。即ち多くの生産的作業は、其の果實(fruits)の取得せらるゝ迄には、一定の時間の經過を必要とする。故に勞働者は、其の仕事を開始するに先立ちて、其の生産を完了する迄自己を維持するに足る可き數量の食物を貯藏するか、若くは之を他人の貯藏物より取得し得るのでなければ、如何なる勞働にも從事することが出來ない。假令之に着手するにしても、其の間に折々自己の生活資料を獲得するために其の仕事を中止せざるを得ない。加ふるに勞働者は、食物其物を多少なりとも豐富に獲得することが出來ない。何となれば斯く食物を獲得する樣式は何れも食物の既に貯藏せらるゝことを必要とするからである。又農業は、唯だ數ヶ月を經過した後に於てのみ食物を齎らすのである。而して農夫の勞働は必ずしも其の全期間中繼續するものではないが、其の大部分は之に從事せざるを得ない。斯の如く農業は食物の貯藏がなければ不可能なるのみならず、又一大社會其物が農業のみに依て生活せんためには、極めて多量の食物の貯藏せらるゝを必要とするのである。加ふるに去年の收穫の終末に貯藏せられたる食物は、單に農業勞働者のみならず、又一大工業勞働者をも維持するに足るが故に、斯る場合には食物以外に幾多の物件も生産することが出來るのである。

斯く生活資料を生産するに用ひらるゝ勞働こそ、翌年の勞働を執行させるに欠く可らざるものである。併し乍ら特に注意を要するは、此の種の先行的若くは準備的勞働 (previous or preparatory labour)と前述せる他の種類の夫れとの間に差異の存することである。即ち製粉業者、農夫、鍛冶屋車力及び車大工、更に水夫、及び造船工等の報償は、終局の産物たるパンより取得せらるゝのである。何となれば彼等は、既述の如く小麥よりパンを製造する場合に夫々作業し、又は作業道具を供給したるを以てゞある。是等總ての勞働者が扶持せらるゝ所の食物を生産する勞働も、亦他の部分の勞働と同じく終局の成果即ち今年の收穫よりの製品たるパンに必要なるものであるが、其の報償は決してパンより取得せらるゝものではない。即ち此の先行的勞働の報償は既に生じたる食物より取得せられたのである。凡そ物品を生産するためには勞働、道具、原料及び勞働者を扶持す可き食物を必要とするのである。併し道具及び原料は、産物を得る以外に何等役立つ所なきか、若くは少なくとも或る他の使用には全然充當せられざるかなるが故に、是等を生産する勞働に對する報償は、

其の産物よりのみ取得せらるゝのである。之に反して食物は眞に有用なるものにして、又人類を扶持す可き直接的使用に充當せらるゝものである。去れば食物の生産に投ぜられて之より償はるゝ勞働は、其の食物に依て扶持せられし次回の勞働の産物を以て復び償はるゝ必要がないのである。例へば若し同一團體の勞働者が或る製造業に從事して、其の側ら彼等の食物を生産したと假定すれば彼等の勞苦に對しては食物もあり、又製造品もある譯である。然るに若し彼等が原料を作り、又道具を製作したとすれば、彼等の勞苦に對しては唯だ製造品があるのみである。

勞働者を維持する食物の所有者に對する報償は、他の種類に屬する。即ち夫れは節欲（abstinence）に對する報償にして、勞働に對する報償ではない。今或る人が食物を貯蓄した時には、彼は之を以て無爲に消費するも、從者又は闘士を養ふも、若くは俳優を招くも、彼の任意である。然るに其の代りに彼が之を生産的勞働者に與へて彼等を雇傭するならば　彼は其の收益より幾多の報償を請求することが出來る。即ち彼は、自己の便益若くは快樂を犧牲に供したる忍耐（forbearance）に對して或る等價を請求するのである。畢竟彼が貯藏物を以て生産的勞働者を雇傭したのは、商業上所謂利潤を獲得せんがためである。更に他の勞働者が道具若くは原料を生産せる間彼等の食物を供給せる人も、亦終局の産物より利潤を獲得したるに相違ない。但し此の場合には終局の産物は、啻に利潤のみならず、又勞働者の報償も供給すると云ふ差異がある。即ち道具の製作者例へば鋤の製作者は、通常其の收穫が終了する迄鋤の支拂を待つものではない。故に農夫は鋤製作者に對して鋤の代價を前拂して、之を耕耘に用ひ、結局其の支拂は收穫の中より償はれる筈である。何となれば農夫は、收穫が農夫の雇傭する農業勞働者の報償、及び之が前拂に對する利潤と共に、尙ほ鋤製作者の雇傭する勞働者を償ふに足る殘金を生じ、而も鋤製作者に利潤を與へ、更に之が合計の前拂に利潤を加へて農夫に給するのでなければ、到底此の支出（outlay）をなさぬであらうから。

以上ミルの說く所は、勞働には次回の勞働に對する生活資料を生産するに用ひらるゝものがあると云ふことである。

## 七

右の如く考へると、他の生産的勞働者を間接若くは遙遠なる方法にて援助する目的ある所の勤勞を列記分類する場合には、其の中に生産的勞働者の消費する生活資料若くは他の必要品を生産する勞働を算入する必要は毫もないやうである。何となれば此の勞働の主たる目的は生活資料其物にして、且生活資料の貯藏は他の仕事をなさしむとは云へ、要するに是れは附帶の結果に過ぎないからである。其の他間接に生産に役立つ勞働の樣式は次の五項目に分つことが出來る。

第一は原料の生産に用ひらるゝ勞働にして、多くの場合に此の勞働は單なる擅有の勞働（labour of mere appropriation）である。例へば鑛夫の勞働の如し。併し乍ら此の勞働は必ずしも原料の抽出のみに限られるものではない。現に石炭の如きは直接人體を煖めるためにも用ひられるから、此の場合の石炭は生産の原料に非ずして、終極の産物（ultimate product）である。其の他之に類するものは寶石類であるが、中には例へば硝子截斷器として用ひらるゝ金剛石の如く僅少の程度ながら生産

の技術に用ひられるものもある。勿論寶石の主たる終局目的は裝飾として直接に用ひるにあるが、其の裝飾に供せらるゝ前に通常或る工業上の過程を必要とするから、尙ほ原料と看做すことも出來やう。

次に原料生産なる項目の中には家屋建築用の木材を伐採するに用ひらるゝ樵夫の勤勉も加へ、場所に依ては更に植林者及び栽培者の勞働も加へなければならぬ。

更に同一の項目の中に包含せらるゝものには農夫の勞働がある。農夫は、亞麻、棉花を栽培し蠶を飼育し、家畜の食料を耕作し、木炭、染料、油質の草木、及び其の他の産業に必要なる有用物件を生産するのである。又毛皮、羽毛を齎らす獵師の勞働、羊毛、獸皮、角、剛毛等を供給する飼羊者及び飼畜者の勞働も然りである。此の外に幾多の部門の産業に於ける加工産物(finished products)は、他の部門の産業に於ける原料となることもある。例へば棉絲の如し。然るに革匠及び鞣皮工の職業の全過程は、原料を變じて所謂調製せられたる原料(prepared material)となすに外ならぬ。尙ほ嚴密に論ずれば殆んど總て食物は、農夫の手に成るものなるを以て、パン燒人又は料理人なる職業に對する原料に過ぎないのである。

第二の間接勞働は、勞働幇助のための器具を製造するに用ひらるゝものである。茲に器具とは、最廣義に用ひて其の中に總ての永續的器具若くは生産幇助物件(all permanent instruments or helps to productions)を包含させるのである。故に點火するに用ふる火打石や火打鎌の類より、蒸氣船若くは最も複雜なる裝置の製造機械に至る迄、悉く此の名目の中に包まれる。然らば器具と原料との境界線は之を何處に設定す可きか、例へば燃料の如きものは通常器具とも謂ひ難く、又原料とも呼び難い。茲に於て經濟學者は一般に生産の直接的手段(immediate means of production)として用ひらるゝ總ての物件――間接的手段に就ては後段に考究する――をば器具の種類に數へるか、若くは原料の種類に加へるのである。思ふに僅かに一度の使用に留まりて――少なくとも其の目的の要具としては――單一の使用に依て破壞せらるゝ所の生産要具を呼ぶに原料なる名稱を以てすれば、始めて器具及び原料の間に於ける境界線は平易便宜に設定せらるゝであらう。例へば燃料の如きは原料である。又羊毛を紡ぎて絲となせば羊毛としての用は盡き、棉絲を織りて布となせば棉絲としての用は盡きるのであるから、矢張り原料である。之に反して樹木を伐採するに用ふる斧は、一回の伐採にて斧としての用が盡きるものでないから、器具である。而して器具の場合には、損耗少なき程優良なる器具と云ふのである。然るに或る物件は正しく原料として分類せられるけれど、一般道具と同じく二度三度の使用に堪えることが出來るとは云へ、而も最初に其の物件の幇助を受けた産物が現存せる間は、其の物件は再び使用せられ難きが如き場合もある。例へば水槽若くは水管を形成せる鐵は更に之を鎔解して、鋤若くは蒸氣汽罐を製作し得るが如き、或は家屋の建築に用ひられた石は之を破壞して、新家屋の建築に使用し得るが如き類である。併し是れは、本原の産物(original products)の現存する限り使用され得ない。何となれば最初の使用が終了する迄は、原料としての職能が繼續して居るからである。然るに器具として分類せらるゝ物件は之と異なる。即ち器具は時に甚だ長明の使用に堪ゆるものもあるが、要するに其の使用の盡きる迄反覆新規の仕事に使用せられ

得るに反して、其の器具を用ひてなされたる仕事は損耗せられずに尙ほ現存し得るものにして、其の損耗するは夫自身の法則に依るか、或は夫自身の因果律に基づく（by its own laws, or by casualties of its own）のである。

原料及び器具の區別より生ずる一實用的差異は、他の場合に取て頗る重要視す可きものである。既述の如く原料は一度にて其の使用が盡きるが故に、其の生產に要する勞働の全量、及び其の生產を繼續せしむ可き諸手段を供給する人の節欲は、其の單一なる使用の果實より償はれなければならぬ。之に反して器具は反覆使用せられ得るが故に、之を用ひて生產したる產物の全量は、之を生產する勞働及び其の勞働を維持したる食物の蓄積者に對する節欲を償ふ可き基本たるものである。若し各個の產物が、其の勞働及び節欲に對する報償若くは其の道具の生產者への報償を前拂したる直接的生產者に對する報償をば分割して、夫々其の一部を引受ければ、各個の產物に取ては些少のものに過ぎないけれども、其の合計は充分なる報償となるのである。

第三、製造工業に用ひらるゝ原料、及び之を幫助す可き器具の外に、準備を施して、或は自然の破壞働因（destroying agencies of nature）に依て或は人間の亂暴や强奪（violence or rapacity of men）に依て其の作用の攪亂せらるゝこと、及び其の產物の損傷せらるゝことを防がなければならぬ。是れよりして產物其物に直接に用ひられざるも、其の生產に役立つ勞働の他の形式が生ずるのである。即ち產業の保護（protection）に用ひらるゝ場合の勞働、是れである。例へば產業用の建物、工場、倉庫、船渠、納屋の如きは之に屬する。併し此の中より勞働者の住家若くは彼等の個人的設備に係る建物を除く。何となれば是等の建物は、彼等の食物と同じく現實的欲望（their actual wants）に供せらるゝものにして、彼等の勞働に對する報償の中に數へ込まる可きが故である。更に牧畜者の職業の如く單に家畜の傷害を保護するに留まるものもある。即ち其の產物の實現に關係する積極的働因（positive agencies）は粗ぼ夫自體にて成長するからである。墻畦を作る人の勞働も亦然り。尙ほ此の中に數ふ可きものには兵士、警官及び判事の勞働がある。是等の官吏は、常に專ら產業保護のために用ひられざるを以て、自ら其の個別的生產者に取ては彼等に對する支拂は、生產費の一部分を構成するものでもない。彼等の俸給は產業の收益より成る租稅を以て支拂はれるのである。而して統治の良好なる國に於ては、官吏の果す勤勞は生產費に等しき價値以上に及ぶのである。即ち若し政府が產業に對して與ふ可き保護を與へずとすれば、其の生產者は生產の時間と勞働とを大に減じて自ら之を保護するか、若くは武裝せる人を雇つて之を保護するか、二者其の一を撰ばざるを得ないであらう。而して其の場合に於ける勞働は、悉く直接に其の產業の收益に依て償はる可きである。若し其の產物が斯る附加的勞働（their additional labour）を償ひ難しとすれば、勢ひ其の生產は廢止せらるゝのである。現存の組織に於ては產物の一部を割きて、其の保護に支拂ふものである。概して政府の經費は冗費多くして大ザッパなものではあるが、併し生產者各自の保護に比すれば、遙かに少額の費用を以て一層佳良なる保護を齎らすものである。

第四、物品の生產に用ひらるゝ勞働以外に、其の生產物を需要者の手許に運搬するに用ひらるゝ勞働も多くある。例へば馬方、車力、船頭、水夫、仲仕。石炭擔人、赤帽、一般鐵道吏員の類であ

る。又總ての運輸道具の製作者の勞働も之に加ふ可きである。例へば大小の船舶、荷馬車、機關車等の製作者の勞働や、通路、運河、鐵道等の建設者の勞働の類である。時として道路は政府の建設に係り、爲めに無償にて公衆に開放する場合もある。併し道路建設者の勞働に對する報償は大方收益より支拂はるゝのである。即ち各個の生産者は道路建設のために一般に賦課せらるゝ租稅の一部分を支拂ふものなるが故に、彼の便宜に役立つ道路の使用に對して結局支拂ふことゝなるのである。但新設の道路が相當の便益を見込んで建設されたとすれば、生産者の支拂へる租稅額以上に其の産業に對する報酬を增加させるものである。

次に生産せられたる物品をば其の需要消費者に運搬するに從事する勞働者の多數は商人及び貿易商人の階級にして、或は之を分配者(distributors)と呼ぶも差支ない。今若し消費者と生産者との取引が直接に限るとすれば、之がために多大の時間と煩勞とを浪費し、又往々實行し難き程の不便を覺えるであらう。殊に兩者が遠隔の地點に存在する場合に然りである。茲に於て時間と勞働との斯る損失を減ぜんがために、上古より市場(fairs and markets)なる仕組を用ひて、此の場所に於て生産者と消費者とは、何等の仲介者(intermediate agency)を要することなくして、定期的に會合の上商取引を遂行したのである。殊に農産物の賣買に役立つた。併し此の場合に於ても尙ほ市場に赴くことは購買者に取て往々甚だしき煩勞となり不便となるのである。加ふるに其の生産に就て不斷の注意を要す可き物品の場合には、斯の如き定期市場(periodical markets)を長期に亘て開催することは不可能なるが故に、消費者の欲する物品は盡く前以て買入れて之を長く貯藏するか、若くは其の缺乏せる時にても長く不足の儘になし置くか、二者其の一を撰ばなければならぬ。故に此の不便を除くために所謂行商人(itinerant dealers)が歡迎されたのである、併し一定の店舗を有し、又一定の顧客を有する商人は、行商人に比すれば遙かに好都合なるが故に、消費者は結局即時に用を辨じ得る店舗商人を選ぶに至るのである。

例へば洋服屋、靴屋、パン屋、其の他多くの商人は、生産者であると同時に、販賣人である。然るに遠方より物品を運送する場合には、同一人が其の製造販賣の双方を有效に監督することは到底不可能である。故に大規模に亘て最良最廉に之を製造する場合には、單一工場と雖も其の製品の販賣を委託す可き地方的仲介者(local channels)を多數に必要とするが故に、小賣業は之を他の機關に委託するのが最も便宜である。次に製品と取引とが一定の程度以上に增加したる場合、即ち一製造工場が多數の商店に製品を供給し、又一商店が往々多數の別個の製造工場より製品を仕入れるに至る場合には、製造業者と販賣人とが直接相互に取引する時には夥しき時間と煩勞とを要するが故に、彼等双方の中間に少數の大販賣人若くは大商人――卸賣商(wholesale dealers)――が出現するに至る。此の卸賣商は各處の生産者より商品を蒐集購入して之を再び多數の小賣商(retailers)に分配賣却するに留まりて、更に之を各個の消費者に分配するものは小賣商である。是等の所謂分配階級(the distributing class)の行爲は、生産階級(the productive class)の行爲を補足するのである、而して斯く分配された商品の代價こそ、分配者の努力と分配業に必要なる基金とに前拂す可き分配者の節慾に對して報償を支拂ふ源泉である。

## 八

以上を以て吾々は、外的自然に用ひられて生産に役立つ勞働の四樣式を擧示し盡した。併し尙ほ勞働雇傭の樣式が一種ある。即ち人間を主體とする勞働にして、前四者に比すれば一層遙遠なのである。社會一般に取ては幼者養育の勞働及び費用は生産條件の一であり、又將來彼等の齎らす收益增加を以て償はる可き支出の一部分ではあるが、併し個人に取ては此の勞働及び費用は通常他の動機に基づくものなるが故に、經濟學の主要目的のために生産費の中に算入せらるゝ必要を見ないのである。併し社會に於ける技術上若くは産業上の敎育は、必らず多大の收益を得るために擧修せらるゝのである。

其の身體に於けると將又頭腦に於けるとを問はず、生産力を賦與する勞働は、社會の生産的作業を成就するための勞働の一部分と看做され得るが故に、生産力を維持し、而して傷害疾病に依る其の破壞薄弱を防禦するために用ひらるゝ勞働と看做され得るのである。例へば內科醫、外科醫の治療の如し。併し人々が外科的手術を受け、若くは投藥診察を乞ふは、專ら經濟的動機に基づくものではない。必らずや斯る醫療を乞ふに足る充分の誘因がある。故に斯る勞働及び支出は、事實上生産を幇助するものではあるが、之に對して經濟學上所謂生産的なる冠詞を附し得ないのである。併し個人を除いて社會が考慮する場合には、此の勞働及び支出も、社會が其の生産的作業を果し、且社會が其の收益に依て償還せらるゝ所の前拂の一部分と看做されなければならぬ。

其の外に直接に終局の産物を幇助する他の勞働は、産業的過程の發明者の勞働である。通常此の勞働が心意的として分類せられるにも拘はらず、ミルは事實上此の勞働が必ずしも心意的ならずとの理由よりして前記の如く分類したのである。凡そ人間の努力は、若干の心意的要素と肉體的要素とより成る。例へば每日梯子を昇降する機械的行爲を繰返す最も愚鈍なる煉瓦職の手傳にしても、多少智的なる職能を果すものにして、斯る點は怜悧なる犬象に優ると云へやう。又純然たる心意勞働も其の外的成果を得る場合には、多少肉體上の成分を必要とする。彼のサー・アイザック、ニウトンの「プリンシピア」(Principia, or Philosophice Naturalis Principia Mathematica, 1687) が發表せらるゝ迄には、自ら執筆するか若くは他人に書取らせるかの肉體的努力が必要とせられたに相違ない。而して彼は其の大著の結構を胸中に考案しつゝ、幾多の圖表を描き、又幾多の計算及び論證を算定したであらう。機械の發明者も單なる頭腦の勞働以外に、尙ほ一般には幾多の手工勞働を遂行するものにして、即ち模型を製作して、其の觀念自體が有效なる行爲を實現し得るや否やを實驗しなければならぬからである。併し乍ら其の心意的なると將又肉體的なるとを問はず、發明者の勞働は、其の生産を齎らすための勞働の一部分である。彼の蒸氣汽罐を發明したるジェイムス・ワット (James Watt) の勞働は、之を製作する機械工若くは之を運轉する機關手の勞働と同じく生産の必要部分である。而して彼に對する報償も、亦機械工若くは機關手の報償と同じく、其の收益より支拂はるゝ見込であつた。故に發明の勞働は、屢々執行の勞働 (labour of execution) と同一なる方法を以て評價せられ、又支拂はるゝのである。裝飾品の製造業者が考案者を雇傭して、新規の模樣形式を工夫せしむるために賃銀なり俸給なりを支拂ふのは、之を製造業者の立場より觀れば、其の發案を模倣す

る一般職工に賃銀を支拂ふと全く同一である。恰かも著述家の勞働が印刷職工及び製本職工の勞働と同じく書物の生産の一部分と看做さるゝ如きである。

次に學者の勞働も、之を國民的見地より觀れば、最狹義に於ける生産の一部分である。何となれば實用的發明は理論的發見の直接的成果であり、又自然力に關する知識の擴張は皆外的生活の目的に對する適用を豐富ならしめるからである。彼の電磁氣電信機は、ハンス・クリスチャン・エルステッツ(Hans Christian Oersted)の實驗と、アンドレー・マリー・アムペア(André Marie Ampère)の數學的攻究との全然豫期せざりし結果である。單なる思索も、純然たる生産的有形的見地より觀て頗る重要である。併し其の有形的果實は成果に相違ないが、概ね學者の研究の直接的對象でない。故に學者の報酬は、一般に其の發見に隨伴して直ちに生ず可き、若くは其の後長年月を經て始めて生ず可き生産增加より支拂はれない。去れば此の終局の影響は、大體經濟學の目的として之を考慮する必要がない。而して學者は單に書物の生産者として、若くは直接其の著書より生ずる他の有用物又は賣却物の生産者としてのみ分類せらるゝのが常である。併し經濟學者が常に考へる如く、今吾々の見地を變へて、即ち個人的行爲及び之を決定す可き動機を考慮せずして、國民的成果を考慮する場合には、知的思辯も亦社會に於て最も有力なる生産的勞働の一と看做され、且斯る勞働を遂行し又其の報酬を供給するに用ひらるゝ社會の資源は甚だ生産的なる支出の一部分と看做さる可きである。

最後にミルは、一般に用ひられる分類樣式たる、産業を分ちて農業的、製造業的及び商業的の三となす方法を採用しないのである。其の故は事實上此の區別が分類の目的を果さないからである、即ち斯る分類を採用すれば幾多の部門の生産的産業を除外することゝなるか、又は其のために甚だしく索强しなければならぬ。例へば「農業上の利害關係者」と云へば農夫、製粉業者、パン燒人等を包含するものであるが、併し製粉業者は農業家であるか、若くは製造業者であるか。通常は製造業者の中に數へるであらう。然らば農業と製造業、若くは製造業と商業との區別は之を何處に設定す可きであらうか。斯る理由よりしてミルは、通俗的用法以外に農業的、製造業的又は商業的の分類を認めないのである。(J. S. Mill, Principles of P. E. edit. by Ashley, pp. 22-43)

尙ほミルは第三章「不生産的勞働」なる題目の下に勞働を分ちて生産的、半ば生産的及び不生産的の三種となし、而して此の區別を物質的富(material wealth)を直接に生産するか否やに基づいて打立ちたのである。併し其の詳細は既に私が紹介した所であるから、茲には省略する。(本誌第十八卷第七號乃至第八號所收の拙稿參照)

## 九

右に紹介したる所が、ミルの所謂生産要素論の大要にして、彼は其の要素を分ちて勞働と適當なる天然物との二種となしたのである。併し彼が其の「經濟學原理」第一編第四章第一節に於て「生産の基本的並に普遍的要素は勞働及び自然的働因であるが、尙ほ此の他に一の要素がある。此の要素を缺く時は、如何なる生産的作業も原始的産業の粗笨なる初步以上に之を行ふことは不可能である。他の一要素とは、既往の勞働の生産物より蓄積せられたる元本(stock)を指す。稱して資本(Capital)

と云ふ。」(Principles, edit. by Ashley, bk. I, ch. IV, § I, p. 54.) と論述し、更に第十章第一節に於て「生産の根本的要件は勞働、資本及び自然的働因の三種である」(Principles, p. 155) と斷言せる點より觀れば、ミルも亦事實上生産要素三元論者であると云ひ得られる。唯だ其の叙述の形式上より觀ればミルは、エッヂヲース、キャナン氏等の説く如く生産要素二元論者であるに過ぎない。(Palgrave's Dictionary of P. E. vol. I. p. 21; E. Cannan, History of Production and Distribution, pp. 41-42.) 故にミルの門下として知らるゝフォセット夫妻 (H. Fawcett, Manuel of P. E.; M. G. Fawcett, Political Economy for beginners)、サイムズ(J. E. Symes, Political Economy) 等が何れも生産要素三元論者であるのは、能くミルの意を體したものである。尙ほミルの所謂第二次的生産要件たる資本に就ては後日稿を改めて紹介する積りである。

然らばミルの生産要素二元論は、何人の所説に追從したるや。今之に答へるに先立ちて暫らく經濟學説史を尋ねるに、抑も生産の要素なる概念は、アダム・スミスが社會の收入を分ちて勞働の賃銀、元本の利子及び土地の賃料(地代)の三となせるに基づく。唯だスミスは之を分配に與る點より論じて、生産の要素又は働因として論じたのではないが、生産論に於て二、三又は四要素を論ずるは、事實上分配論に於ける地代、賃銀、利子、及び利潤を期待するがためである。而して生産三要素説を確定した最初の經濟學者は、佛國のジャン・バティスト・セイである。曰く

「勞働、資本、及び自然的働因は各々其の分を盡して共働す。此の三者は物の生産に缺く可らざるものにして、之を生産の三要素と云ふ」。(J. B. Say, Traité. 2. E. 1814. v.l. I. p. 35.) セイの所説に就ては增井敎授邦譯「セイ經濟學」第一編第一章以下を參照ありたし。

飜つて英國に於てはスミスを始めとして、マルサス、リカアドオ、マッカロック等に至る迄何れの經濟學者も、生産要素なるものを取扱はなかつた。唯だ其の間に於てポアローは、其の著書中に土地、勞働、資本及び「夫等の共同作用」なる章句を設けたるも、後人に認めらるゝ所はなかつた。(D. Boileau, Introduction to the Study of P. E. 1811.) 此の故に英國に於て生産要素を取扱つた最初の經濟學者は、一八二一年に「經濟學要論」(Elements of P. E. 1821) を公にせるジェイムス・ミル (James Mill) である。斯く生産の要素を論じたのは、父ミルであるけれども、其の要論の第一版に於ては僅かに其の要素としての勞働及び資本を擧示したるに留まる。一八二四年の第二版に至りて聊か紙數を增加して、稍々詳細に二要素を論じた。之に反してトレンスは明かに三要素を認めて「富の原始材料を供給する土地、是等の原料を占有し、準備し、增大し、若くは移轉する勞働、是等の種々の作用を幇助する資本は總て生産の要件である」を論じたが、夫れとて生産論の説明中に勞働、資本、及び土地なる分類を用ひた譯ではない。(R. Torrens, Production of Wealth, 1821, p. 66.) 之より後れて出でたるシイニオア及びスチュアート・ミルは、共に勞働及び自然的働因を「生産の第一次的要件」となし、資本――但しシイニオアは之を節欲(abstience)と呼んだ――を第二次的要件となした。(N. W. Senior, Political Economy, 8vo ed. pp. 57. 58.) (E. Cannan's History, pp. 40-42.)

斯く觀じ來ればスチュアート・ミルの生産要素二元論は、父ミル及びトレンスの所説に敎へられたるものゝ如くなるが、其の二要素の同一なる點より推せばシイニオアに從へるものとも云へやう。

更にシイニオア及びスチュアート・ミルの兩者が事實上生産要素三元論者なる點より考ふれば、遡つて佛國のセイの提唱に贊せるならんか。其の何れにしても、ジョン・スチュアート・ミルの時には未だ明確に勞働、土地（若くは自然的働因）及び資本の三者が生産の要素と認められなかつたこと丈けはエッヂヲース、キャナン氏等の指摘する通りである

# アメリカに於けるフリイドリヒ・リスト

山田正夫

Friedrich List が歐羅巴を逐はれて合衆國に渡つたのは一八二五年であつた。

愛國と愛鄕の熱情に燃えた「Schwaben の政治家」List が、心ならずも異邦の地に生活するの餘儀なきに至つたのは、また全く彼の愛國的愛鄕的赤心の餘りに外ならなかつたのである。彼は生地 Rentlugen から政界に乘り出した當初から、Württemberg の疲弊せる政治經濟狀態に對して大膽なる改革案を提唱して、早くも當局の注目する所となつたが、一八二〇年に選擧せられて議會に列なるを得るに至るや、彼は直ちに激烈なる提案を行ひ、更に Reutlingen 選擧民の希望に基く請願書を起草して印刷に附した。事件は彼が家宅搜索を受けて此の印刷物を押收せられ、秩序紊亂の廉を以て起訴せられたるに始まつて、遂に彼は爾後議會に參與すべき權能を否定せられ、一八二二年の判決に依つて十ヶ月の城内禁固と訴訟費用の負擔とを宣告せられて、あらゆる公民權をも剝奪せらるゝに至つた。けれども彼は斯くの如き處刑を屑しとせず、一旦 Württemberg の國境を超え英佛を始め各地を放浪して定住の所と文筆の職とを探したが、その何れをも求めることは出來なかつた。List が渡米の志を懷くに至つたのは此の放浪中 Paris に於いて Lafayette 將軍に接近した折、近く合衆國に招かれて渡航すべき同將軍に、懇切なる同伴の勸誘を受けしにその端を發するものである。